

◎今昔物語集の大きな本を、その四冊を取っ替え引っ替え覗いている。とこう書きながら、“とっかえひっかえ”この言葉が気になり検索してみると先の漢字が現れた。漢字を見て、「なるほど」とうなずいた。話は脱線したが、今昔物語は、シリーズ的に同じ話が続く構成だね。オレの好きな女盗賊の話の前後には、同じ盗賊の話が次々現れる。

◎不被知人女盗人語第三<人に知られぬをむぬすびとのこと>神変不可思議な女盗賊。色で釣られ女賊の情夫となり、その指揮下に押し込み強盗を働いた三十男の数奇な体験談。女が男を情夫として、その心を完全に魅了し、有能忠実な盗賊に仕上げていくその過程が、ロマンチックで、エロチックで、お気に入りの話しである。

◎西市蔵入盗人語第一<にしのいちのくらにいるぬすびとのこと>

◎この話は、時代劇も現代劇もありそうな盗賊ドラマ風で、妙に面白い。脚本を書いてみよう。

◎華の都の両替商の大店の金庫室に一人のあやしきものが立て籠もった。「すわ強盗だ 千両箱が」ということで、パトカーやら警察車両がビルを取り囲み、万全の包囲体制をとった。人質も取らない単独犯ならば、催涙弾なりを転がし、簡単にお縄にできそうだが、盗賊は妙なことを言うてくる。盗賊は扉の隙間から警察官を手招きして、「おい 奉行と話がしたい」「奉行殿に そとこちらに来てもらい お話がある」それを聞いた警察官は、視察に来ていた奉行殿にそと申し上げた。「盗人がかように申し上げております」奉行はそれを聞き、扉に近づこうとした。まわりの警官たち、位の高い与力も同心も、位の低い岡っ引きも、「お奉行 そういうことはしてはいけません なりません」と奉行を諫めるが、奉行は、「これは なにか 子細な事情があるのでは ないか 聞かなければいけない話があるのでは」と金庫の扉に近づいた。盗人は金庫の扉を開き、奉行殿に、「こちらにお入りください」と金庫の中に招き入れ、扉の鍵をかけた。

事の顛末を見たまわりの奉行所一家どもは驚いた。こともあろうに、お奉行が盗人に招き入れられ、金庫の中に連れ去られ、鍵をかけて監禁されてしまった。「なんちゅうこっちゃ なんたる馬鹿げた事態に」「お奉行が盗人に招かれ 金庫の中に入り 鍵を掛けられ 話をする・前代未聞だ・そんなばかな・」警察官どもは誹りあい腹を立てる。

しばらくして、お奉行が扉から出てきて、「これには訳がある しばらくお縄にしておいてはならない 大君に奏上しなければ ならないことがある」と言って宮中に参内した。金庫の前に帰ってきたお奉行は、「この逮捕はまかりならぬ 警察官どもは 速やかに 撤退せよ」その命令で、警察官たちはいなくなった。お奉行は一人残り、夕暮れを待って、金庫の扉の側により、天皇の言葉を伝えた。その言葉を聞いた盗人は大声をあげて哭いた。お奉行もそと帰っていった。盗人は金庫から出るとそのまま行方知れずとなった。

盗人がだれであったのか、盗人が何を言われたのか、天皇とどういう関係だったのか、摩訶不思議な物語であるが、余韻が残りすぎ暖かい気持ちになってくる。

◎検非違使<令外官、不法や違法を検察する天皇の使者>：平安時代に設置された官。はじめは京都の犯罪、風俗の取り締まりなどの警察業務を担当したが、後に、告訴、裁判もあつかい強大な権力をもった。平安後期には諸国にも置かれたが、武士の台頭で衰退した。

◎放免；検非違使の下部（しもべ）：放免囚人：罪を犯して囚人となったあと、計らいをもって放免となったもの。絵巻によると、髭ずら、藍染めの上着、錦繡の袴、曲がりくねった棒、異様な格好である。

もうひとつ、今のウクライナ戦争で、ロシアの民間軍事会社が、囚人を兵隊に仕立て戦場に送り出している、この囚人たちがたくさん戦場で殺されているという報道を聞く。

◎岡っ引き：江戸時代、目明しと同意。銭形平次のようなヒーローとは程遠い存在で、庶民の弱みに付け込みゆすり、たかりまがいのことをしていた。公的身分はなく、町同心が個人で使っていた。

隠世人聲成〇〇語第四くよをかくる人の婿となる〇〇こと>

◎この話も、女盗賊の情夫の話と同様に楽しく読んだ。父母に先立たれ、前途も暗い男が、縁あって豊かな女と契り、愛情こまやかに通いつめるうちに、突然女の父と名乗る鬼怪な人物が現れ、世を忍ぶ身として陰ながら二人の生活を窺っていたが、男の誠意を認めたからと言って一切の財産・所領を男に譲渡し、娘のことを託して立ち去った。その後、父は、委細を尽くした手紙を届け、男に謝するとともに、数奇な運命の我が身を打ち明け、二度と姿を見せなかった。娘の父は、盗賊に加担し、無残な傷を受けて世を逃れた、生ける屍である。そんな境遇で、残された娘に対する不憫の情、屈折した愛情、謎めいた富裕な結婚生活が面白い。

◎父の登場場面：而ル間、思ヒ不懸ヌ方（おもひかけぬかた）ナル障子ヲ引開レバ、「誰ガ此（かく）ハ開クルニ有ラム」ト、思モ不取デ見遣（あえてみやり）タルニ、紅ノ衣ニ蘇芳染ノ水旱（すほうぞめのすいかん）ノ重ネタル袖口ノ差出（さしいで）タレバ、「此ハ何（い）カニ。誰ガ来ルゾ」と思ヒ〇〇テ有ルニ、差臨（さしのぞき）タレバ、髪ヲバ後様に結テ、烏帽子モセヌ者ノ、落蹲（らくそん）ト云フ舞ノ様ニテ有レバ、奇異（あさまし）ク怖シク思ヒテ、「此ハ昼盗人（ひるぬすびと）ノ入ニタルニコソ有ケレ」と思テ、枕上ナル太刀ヲ取ルママニ、「彼（あ）レハ何者ゾ。人ヤ有ル」と高（たかや）カニ云ヘバ、妻（め）は引被（ひきかつぎ）テ汗水ニ成テ臥タリ。

◎「なんだろう 誰が来たのか」顔が覗いた。見れば髪を後ろざまに結び、烏帽子もつけずまるで落蹲（らくそん）という舞の面のような顔なので、ぎょっとして恐ろしくなり、「さては 昼盗人が押し入ったに違いない」と思い枕もとの太刀をとるや、「お前は何者だ だれかいないのか」と大声を上げると、妻は衣を引きかぶって、汗みずくになってうずくまっていた。

声を聞いて、この落蹲に似たものが近寄って来て、「どうぞお静かに わたしはあなた様が恐ろしく思うような者ではありません この姿をご覧になって恐がりなさるのはごもっともでございますが わたしの言うことをよくお聞きくだされば 哀れとお思いになることもございましょう ですから まず お聞きになってから 怖がるなら怖がってください」と言い続けて涙を流してさめざめと泣く。それとともに妻も泣き出した様子なので、男はなにがなにやら訳がわからず、居ずまいを正して心を鎮め、「これはどうしたことだ 誰が入って来て そんなことを言うのか」と言いながらも心中では、「盗人が盗みに入ったのだろうか それとも殺しに来たのだろうか」と思ったが、そんな様子もなくさめざめと泣くのが不思議であった。

するとこの落蹲男、「申し上げますにつけても 申しにくく 心苦しいことでございますが 知っていただかないわけにはいけませんので」

男のいうには、あなた様の妻はわたしのひとり娘です。この娘を真実愛しく思ってください方と信じます。よもや裏切りなないものと、もし裏切れればお怨み申しますぞ。私は二度と現れません。蔵の鍵を五六個と、近江の土地の証文を差し上げます。

その後、落蹲男から手紙が来た。私は近江の在の人間で、人にだまされ盗人稼業を続けたが捕えられてしまった。どうにか逃げおおせましたが、世間に顔向けできないような恥を受け、経歴を隠し、死んだものと思わせ、隠れ住んでおります。

◎妻の父の服装と顔つきが気になる。ぎょっとするようないでたちと顔というが、その容姿に顔つきにびっくり仰天のさまが伝わってこないのがまことに残念。顔つきも、落蹲の面というが、これは検索すると画像が出てくる、オレから見れば、愛くるしいオカメ風のオヤジ顔である。

◎蘇芳色：染料の色の事：赤に相当。深蘇芳はえんじ、浅蘇芳は赤っぽい紫。

◎禁色（きんじき）平安時代、天皇や貴族などの袍（ほう：公卿の装束）の色を、一般臣下が着用することを禁じた制度。その反対は：ゆるし色。天皇にのみ用いられた絶対禁色：黄櫨染（こうろぜん：オレンジ色）

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎ヤマトタケルの戦いと恋：天翔ける英雄　：先生は、こんな題名をつけるんだ。

◎オホタラシヒコオシロワケは、纏向の日代（ひしろ）の宮に座まして、天の下を治めたもうた。この大君には幾人かの妻がおり、名が伝わる御子が 21 柱、名を聞いておらぬ御子が 59 柱、併せて 80 柱の御子がいた。それぞれの名前が羅列されるが、カットじゃな。この項は、ほとんどヤマトタケルの物語で占められており、景行天皇の系譜は語られるが、その他の記事はない。しかもヤマトタケルを引き立てるために、悪役的な性格付けがなされている、天皇の歴史を語るといふ本筋から離れている。古事記は日本書紀と同様天皇家の歴史を語るはずだが、古事記の神話や説話には、反国家的、反王権的性格が濃厚に現れており、単純に支配者の手によるものとはいいがたい。古事記での、古代の語りべの神話や伝承を味わってみたい。

◎多くの御子たちの中で、ワカタラシヒコがあとを継いだ。

◎80 柱の中に、オホウスとヲウスの子と弟がいた。ヲウスは成長してヤマトタケルとなる。日本書紀によれば二人は双子であったとするが、古事記の場合はすでに成長した兄と少年の弟の関係で語られる。

◎さて、このオホタラシヒコの大君には、すでに多くの妃たちや御子たちがいましたのじゃが、ある時、三野の国造の祖オホネの娘で、名はエヒメ、オトヒメの二人のおとめは、その姿かたちがうるわしいと聞かれての、御子のオホウスを三野の国に遣わして、娘たちを召し上げようとなされたのじゃった。ところが、遣わされたオホウスは、大君のために召し上げずに、そのままおのれみずからその二人のおとめを妻にしてしもうての、さらに別の女を探して、その女を、エヒメとオトヒメじゃと言うて、大君をあざむいて差し上げたのじゃ。ところが大君は、その女たちが違う女じゃというのを見抜いておっての、いつまでも眺めておるばかりで、床に呼ぶこともせずに女たちを悩まし苦しめたのじゃった。

◎ヤマトタケルの話の前に、プロローグとして組まれた話、使いとして派遣された皇子が天皇の女を奪って自分のものにする。前の天皇の后を手に入れる、天皇の女を奪う、様々に語られている。これは天皇に対する反逆であり、大変危険な行為である。また天皇が地方豪族の女達を召し上げたり子を産ませたりするのは、それらの豪族たちの天皇家への服属を象徴する。

◎ある時、大君は、御子のヲウスに向こうて、「いかなるわけで　兄のオホウスは、朝と夕との席に参り出てこないのか　そなた　ねんごろに教え諭してやりなさい」

◎ねんごろ：の解釈：大君は労をねぎらって・・という意味か。ヲウスはそれじゃ徹底的に痛めつける。

◎五日経ってもオホウスは出てこない。そらそうじゃろう、大君の女をおのれの妻にしてしもうたのじゃから、大君にあわせる顔がなかったんじゃろう。兄のオホウスはひとかどの男じゃったが、年の離れたヲウスはヤマトオグナと呼ばれる少年だった。

◎大君、「どうして兄はながいあいだでてこないのだ」「ヲウスは、「ねんごろにさとしました」「いかにねんごろに」「夜明けに　兄が厠に入る時をねらって、待ち捕えて掴み潰し、その手と足を引きちぎり　コモに包んで投げ捨ててしまいました」

◎それを聞いた大君は、おのれの御子でありながら、その猛々しく荒々しい心に畏（おそれ）をなしてしもうての、「西の方には　おのれらをクマソタケルと呼ぶ兄弟（はらから）が二人が棲んでいる　こやつどもは　大君に従わず恭しい心もない人どもである　それゆえに　打ち取ってまいれ」と戦に遣わした。

◎叔母のヤマトヒメから、叔母がいつも身につけている御衣（みけし）と御裳（みも）を守り神としてもらい、短い剣を懐に入れ、西の方へと出向いた。

◎今日は、軽〜く山を歩いて来た。この、軽〜くというのは、「樹々のスケッチをしたい 山の緑を見たい」「連れてって」という方がおられ、「そんじゃ 軽〜く 行きましょうか」と出かけた。今の季節、梅雨の末期で、天気予報氏は、「大雨 土砂崩れ・・・」「命の危険を感じたら すぐに逃げてください」「線状降水帯が発生」「雷竜巻が発生する」静かにさとしてくれる。がなり立て、かまびすしいよりは、静かなアナウンスの方が恐怖感を感じる。オレの住まう茨木市も毎日ちょっとずつ雨が降る。雨は降るが災害に到る雨ではない。毎日の日課で安威川河原に2時間ほどでかけるが、ずぶ濡れになって帰ってきたのは1回だけだった。あと2回ほどは少々濡れたが体の中からの汗と相まって差し引きゼロだった。ゼリはおかしな表現だが、ま、いいか。

◎そんなわけで、今日の出発も天気予報をにらみながら、「朝の時点で決めます」という変則的な出発になった。昨日の夜も寝る前にアトリエの屋根がざわつくぐらいの降りだったので、「これはむりかな」と起きてみると、空が明るい。九州四国あたりでは、命の危険報道が続いている、近畿は午後からバケツをひっくり返したようなばらばら雨がざっと降るといふ。「それじゃ行きましょう 2時頃には車のところに帰りましょう 1時間ぐらい降られるかもしれないが・・・」ということで出発した。

◎山の下りで、「右横大腿骨がおかしい なんだこれ」と思いながら1時間ほど運転して帰った。「あれれ おかしい なんだこれ」「またなにか 整形関係の痛みかな いやだな 山に登れなくなるじゃないの」なんて思いながら今日撮ってきた山の写真を整理していた。「やはりおかしい」と思いながら湿布薬を貼った。

◎「晩御飯 スパゲティがいい 造って」と頼まれ、「任して」とクックパッドを開いてみた。あっさり和風スパゲティと出ている。なすび、ベーコンを炒め、麺つゆのたれ、みりん、ちょっとのバターでからめるとなっている。「よしこれだ 簡単だ」作りながら、たまねぎ、きのこ、やまいも短冊、チーズを追加した。「われながら美味いねと風呂を沸かした。

◎服を脱ぎながら、「あれえ いてて」今度は右の肘だ。「あ あああ 転んだんだ」思い出した、すってんころりん、道路のゴムにケつまづいて右の手の平、右の肘を打ってイテテだったのを思い出した。「あれれ 大腿骨もその時に打ったのか 昨日の夜から痛かった かな」なんて思い違いをしていた。これは全部打撲傷だった、たいしたものでじゃなくよかった、よかったである、お騒がせ。

◎ひっくり返る、こける、若いころから山の中ではよく転んだね。「ここは危険だ 転ぶと死ぬぞ」というところでは慎重にゆっくり、気を入れて歩くので転ぶことはない。転ぶときはやや気を抜いた時、よそ見た時、すってんころりんだが、苦笑いをして起き上がる。今日のコロリは湿った舗装林道、ゴムに長靴が引っかかった、イテテであった。

◎ゆっくり歩いた、樹々を見て、苔を見て、ピークハントを意識せずに歩いた。きよろきよろして歩くと、気になる景色があるもんだね。樹の肌ってこんなものだったのか、こやつは個性的、あの樹の曲線は歪むねえ、気になりだして見つめてしまう。

◎赤樫：この樹はいつも見ていた、毎回見ていて、「いいなあ かつこうよし」と思っていた。今日は雨に濡れ雰囲気が違った。「なんの樹」検索すると、赤樫とでた。赤黒い木肌、身近な樹なんだがその風合いは外国人を見るようで、威風堂々である。でかいモミの樹もいいねえ。ごつごつ松もいいねえ。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎さて、ヲウスは、長い旅を経てクマソタケルの家にやってきたが、家のまわりは堅固に守られている。クマソタケルの家の中で新築の宴があると聞き、ヲウスは女装して宴に参加すると、クマソタケルの兄弟がその美しい乙女を見初めて二人の間に座らせた。ヲウスは頃合いを見計って兄を剣で刺し殺し、弟を追いかけ剣を尻から刺し通した。クマソタケルは死に際に、「猛々しい男よ ヤマトタケルと名乗るがいい」と言った。

◎次の話は、「そらあ ずっこい きたない・・・」という話。今の常識がそういわせるのか、それとも正しいのか。
◎ヤマトタケルはまっすぐ倭に向かわず、出雲にイズモタケルという猛々しい頭がおると聞いていたので、そのものを殺そうと出雲に向かった。出雲にたどり着くとすぐに、イズモタケルと友の契りを結び、木で偽りの太刀を作り、肥の川に水浴びを誘った。水から上がり太刀合わせをしようと挑んだ。偽りの木の太刀が抜けないのをしり目に一太刀でイズモタケルを打ち殺した。そうして歌をうたった。

やつめさす いずもたけるが 藻が繁（しじ）に芽吹く イズモノタケルが
はけるたち つづらさは巻き 身に佩いた太刀 鞆の飾りは葛（つづら）も巻いて
さみ無しにあはれ 中身の刃が無く哀れにも

◎西の方を払い治めて、大君に返り言を申し上げた。大君はねぎらいの言葉もかけず、「東の方（ひんがしのかた） 十あまり二つの国に沿うた道の荒ぶる神と 従おうとしない人どもを言向け平らげよ」

◎日本書記では、大君との対立が見られず、勇敢で従順な英雄將軍として書かれている。

◎伊勢の大御神の宮に寄り、齋宮である叔母のヤマトヒメと会い、泣き言を並べた。「西から帰ってすぐに 軍人（いくさびと）も与えられず 東方面を平らげることを命じられた わたしなど死んでしまえとお考えなのか・・・」ヤマトヒメは、ヤマタノオロチから出た草那芸（くさなぎ）の剣と袋をお授けになった。

◎尾張の国に到ったヤマトタケルは、尾張の国造の祖：ミヤズヒメを妻になそうとしたが、帰る時にまぐわおうと思ひ直し、契りを定めて東に向かった。

◎相武（さがむ）の国に到りついた時、その国造が、「野の中の沼の神が 荒れ狂うので 困っております」ヤマトタケルは、神を獲ろうとして野に入ると、国造が火を放ち焼き殺そうとした。ヤマトタケルが欺かれたと知った時には、時すでに遅し・・・。叔母のヤマトヒメがくれた袋には火打石が入っていた。「火の中で火打石」と思ったが計りごとがひらめいた。草那芸の剣で草を薙ぎ、火打石で火をつけ、襲ってくる火の勢いはね返した。<向かい火：森林火災などで、こちら側から火を点け消化する方法：より延焼する危険性もある。>

◎東に進み、走水（はしりみず：浦賀水道）の海を船で渡ろうとした時、暴風雨に会った。妃のオトタチバナヒメが、「身代わりとなって海に入りましょう」と言って入水した。妃の別れの歌。<なんと妃がいた・・・？>

さねさし さがむのをのに 嶺も険しい 相模の小野で
もゆる火の はなかに立ちて 燃え盛る火の その火の中に立ち
とひしきみはも 言問いし君よ

◎そこからなおも奥に分け入り生き遭うごとに荒ぶる蝦夷どもを言向け、また、山や河の荒ぶる神どもを平らげ和（やわ）らげ、ようやく東の果てをきわめて、踵を返して都へと上る・・・。

◎甲斐の国の酒折の宮に坐し歌をうたった。それを聞いた火焚きの老人（おきな）歌を継いだ。

にひばり つくばを過ぎて 新治から 筑波を過ぎて
いくよか寝つる 旅寝する夜はいく重ね

かがなびて よにはこのよ 指おりて 夜は九つ
ひにはとをかを 昼は十日に

- ◎昨日、急に思い立ち、「山 愛宕でいいや」てなことで今9時、JR 保津峡駅を降り道路に出て右へ、しばらく歩いて崖の方を気にしていると、“けものみち”とも思えるような階段状の踏み跡を登っていく。10年前の元気なころは、愛宕から水尾の方に下り、JR 保津峡駅やら川の流れを横目に見て、阪急嵐山駅まで何度か歩いたことがある。当時、この登山口は知らなかった。
- ◎山は久しぶりの感、調べるとほとんど一か月ぶり、八ヶ岳に行って以来だった。最近には月に2回ぐらいのペースで登っていたが、梅雨に入りだらだら雨、晴れた日は用事が入っていて、なかなか行けなかった。そんなこんなで今日行っておかなくっちゃ、山に忘れられる、登る感覚が失われる、なんて勝手なことをほざきながら出かけた。電車に乗りながら、愛宕は近所の山だとはいえだらだら電車の時間がかかる。「こんなことなら 北小松の方が よかった かもねえ」と思い直している。出発は7時半ごろで登山口に9時、これなら北小松と同じ時間だ。次回はぜひ北小松だ。
- ◎保津峡からの登りは2回目。ちょうど一年前に山田さんに“ツツジ尾根”を教えられ歩いた。汗びっしょりになってバス停にたどり着いた覚えがある。今日はまだ、梅雨が空けていないようだが、35度の予想が出ていた。40分ほど歩いて一本取った。この道は参道と合流するまでの1.2時間、ひたすら上る、視界がない、木が茂りまったく見えない。空を見上げて上の方に青空と白い雲が見えるだけ。視界がほとんどないというのはつまらない。歩きながら、「あれれ えらく しんどい・・・」とペースを落とした。一昨日久しぶりに痛飲した。5歳下の男と十歳下の男女4人で高槻で飲んだ。暑いのでまずはビールを飲みそのあと冷酒である。この何年か、「酒が飲めなくなった」と飲まない日が続き、宴会酒で飲む時も二合ぐらいで終わっていたが、半年ぐらい前から三合になり、次には数字がわからなくなり、昔のように飲むようになってきている。一日空けたので、「もう アルコールは残ってないだろう 大丈夫だろう」と思ったが、肝臓くんが赤信号を出しているのかな。「山に登る前の2.3日は飲むな」なんて人に言っているが、これは正論だね。
- ◎参道との合流手前で、カップヌードルにテルモスの湯を入れ3分待った。この身体のたるさ、参道から引き返して帰れということかとぞっとしていた。盛夏の今、熱いカップヌードルが心地よく腹に入っていく、塩気の汁まで全部飲みほし、「暑いものも いけるねえ」と実感。
- ◎参道に合流すると、3人4人と上っている。オレもゆっくり登りだした。このゆっくりが身体を回復してしてくれる、ゆっくりノンストップで参道の平らな道を、石の積まれた階段を登っていく。
- ◎愛宕神社を通り過ぎ、竜ヶ岳の見えるところまでやってきた。やっと視界が開け、向こうの山が見える、空の半分が見える、草が見える、樹々が見える。山はこうでなくっちゃ、まわりの見えないのは嫌だねえ。もっとも冬になれば葉も落ち、いいかもしれない。
- ◎12:30ころに竜ヶ岳が見えるところ、手造りベンチがあるところにやってきた。今日の予定は竜ヶ岳まで行って帰るコースだったが、「パスだよ」とベンチに腰掛け弁当を広げた。朝、玄米ごはん、梅干し、ベーコンと卵の入った野菜炒めを作った。カップヌードルがあるのでサンドイッチはいらないね。行動のパンは二つ用意してある。水は2L持った。今日はまだ盛夏ではないのと、日陰ばかりなので蒸し暑さは感じるが、照り付けるギラギラ暑さはない。夏は、途中で水場の無い山は3L近く持ってこないと不安だ。今日も帰り道の下の方の林道で水を汲みごくごくいただいた。
- ◎林道に降りバス停まで歩く。途中の水場でタオルを濡らし体を拭き、シャツを着替えた。バスの時間は毎時50分だったかなと思いながら歩いた。30ほどの待ち時間でやって来たバスに乗って嵐山駅まで帰った。嵐山線の車内放送で、「南茨木駅で 人身事故があり 京都線は 全線不通だ」という。桂駅で梅田行きホームに行くと、ガラガラの各駅停車が止まっていた。座って待っていると「45分ごろに 動き出す予定だ」というアナウンス。やれやれと家族に、「無事下山 ながら 電車が人身事故で不通 15分ぐらいで動き出す」とメールで連絡を入れた。オレの聞き違いで、15分後じゃなく1時間と15分後だとわかった。やれやれだ、疲れていたものでうつらうつらして待った。

◎国立国際美術館：大阪〈ホーム・スイート・ホーム〉

◎ホーム・スイート・ホーム：タイトルのそれは、いとしの我が家、などとも訳され用いられてきました。ビター（bitter: 苦しい・苦い）な社会が続く中で、私たちのホーム・スイート・ホームを見つめ直します。

◎娘一家が、わざわざ親孝行に東京からやって来てくれる、有馬でホテルをとって招待してくれる。その前夜祭で、「建築の展覧会 かな 見に行こう」と誘われた。ホームという題名から、建築、家庭、塊り、集まり、構造物などいろいろな想像しながら出向いた。館の能書きを読んでみると、ホームには、私たちが過ごす物質的な家、また家に集う集合体である家族、故郷そして祖国の意味もあります。

本展では、歴史、記憶、アイデンティティ、わたしたちの居場所、役割等をキーワードに表現された作品群から、私たちににとっての「ホーム」家そして家族とは何か、わたしたちが所属する地域、社会の変容、普遍性を浮かび上がらせることを試みます。

◎厳かな美術館の壁に伝って、児童画のようなスケッチが5.6枚飾られている。タイトルも解説も読まずに次に進んだ。

◎木造建築に触れたアート。日本の一昔前の安価な日本建築、それが朝鮮半島や台湾で建てられた過去の話。その過去を拾い上げて、潰れ行く、解体寸前の日本家屋の氣息えんえんの姿をさりげなくあぶり出していく作業。これも、「オレには 興味がわからない」としばらく見て次に移った。

◎次の2点は動画の世界、まず一つ目。

キリストがいて、ホームレスがいて、女がいて、聖者がいて、そんなこんなが話をする、身体を動かし舞踏をする、ヘッドホンを付けなかったのが、誰が何を言い、どんな言葉が流れていたのかはわからない。というよりその言葉の節節を聞きたくない。男が話し、女が話し、霊が、砂が、大地が、ぼやいているのかもしれないが、その話の内容はもうオレには必要ない。薄汚い人たちが話す、うなずく、聞く、その動きに魅せられた。

◎二つ目の動画、それは昔々の中国にあったおかしな話。

豆腐を造って一儲けしようという夫婦がいた。材料の仕入れを任された旦那が大豆を買いに出かけるが、その道中で酒や博打に消えてしまい、旦那は砂を袋に入れて持ち帰る。青いビニール袋にかぼちゃぐらいの大きさの砂が入っている、その砂袋がどんと置かれる。砂を固めたものが、スーパーの豆腐容器、白っぽい豆腐入れに入っている、それが延々と映し出される。砂の豆腐の昔話が横の壁に書いてある。画面に映る砂の袋、豆腐容器に入った砂の塊、昔話を知って、なおかつこの表現は面白い。

◎あとは興味を引かなかった、ごめんちゃい。

◎10人近い人たちのそれぞれの発表、これが美術の世界だ、今の美術だ。これらの表現が美術なのかどうかは知らないが、そんな難しい話は横に置いて、二つの映像の表現を大いに楽しんだ。反対に10人の中で、絵画であるとか、立体作品であるとか、具象・抽象にかかわらず興味を引かなかった。舞踏の世界、古代の昔話にヒントを得た映像表現が面白かった。

自身の生きざまを振り返って、「知っているぞ」「感じたことがあるぞ」「面白い」そんなこんなを思い起こし、脳の中でどれかのスイッチが入り組み立てくれる。何をどう組んでいくのか、「いやいや君 構成してはいけないよ」「理解させては いけないぞ」脳のセンサーのおもむくままに、これとこれを斜めにひっつけ、そのバランスの悪さ楽しんで、「どうだどうだ」と子供のようにドヤ顔を見せていく、そんなオレになりたい。

- ◎前回の美術館から続き、二日間の話。グルメなんてことはめったに書かないオレだけれど、何となく爽やかに過ぎた時間の話でやんす。
- ◎姉嬢一家は大阪駅前のホテルに泊まっている。大阪中の島にある国立国際美術館から大阪駅までの間、「ええと どこがいいか・・・」前日から我が家では考えていた。「達磨 新地の・・・」なるほどうまいことを言う、翌日は豪華晚餐が待っている、ならば大阪新世界の串カツ屋が新地に店を出している、そこだと決めた。美術館が終わって、「オレ 歩くから 四人は タクシーできて」と歩き出した。スマホに向かって、「北新地のだるま」とささやくと地図が出て、「こっち こっち」と案内してくれる。大阪をうろうろしていたのは20年もっと前、このあたりは隅々までとは言わないが、どこに行けば何があり、あちらに行けば遠回り、あちらをまわれば二つの用事がスムーズに片付く、なんて大股にてくてく歩いて市内を闊歩していた。ところが今は、新地はどっち、あれは確かそれなんだが、この道はどっちに行くのやらとなかなか頼りない話が続く。
- ◎スマホ君がだるまに到着しましたと言うが、ない、あれれ・・・。小さい看板があり、まだ陽の明るい5時前、ガラガラと扉を開け5人分の席を用意してもらった。しばらくして、外に車から降りる人影が見え、扉を開け迎えに行った。中学2年生、肉を喰い盛りの男の子にとって、普段のグルメな店からすれば、「おおなんだか魅力的」と映ってくれたかな。野菜に肉にビールを頼んだ。東京一家は飲まないで、ジンジャエールとかウーロン茶、大阪一家はビールをいただいた。
- ◎達磨のあとは、明日があるからとそのまま帰った。有馬のホテルは3時がチェックイン、ゆっくり行こうと12時半に家を出た。地図で調べると有馬と茨木は真横に並ぶ、有馬は西にまっすぐだ。近所から高速に乗ると50分ぐらいで行くらしい。有馬は何度か行ったことがある、ホテルに泊まって美味しい物を喰ったこともある。2年前には芦屋川から登って有馬に下りてきたが、「帰りは・・・？」ハタと困ったことがある。「高速バスで大阪へ 地下鉄で神戸へ・・・どっちもいやだなあ・・・」宝塚行のバス停があった、「よしこれだ」と長らく待って乗ったが、乗車時間が1時間もかかってしまった。今年の春は、芦屋川駅から宝塚駅まで六甲山を縦走したが、なかなかハードな山だった。
- ◎大阪三人組はホテルに早く着いた。1時間ほどで東京三人組も到着、チェックインを終わってみんなで部屋に。この東急ホテルは斜面に立っているのと、増築をしたせいなのか、迷路のようにややこしい。ここは一人で外にも出られないなど地図の読めないオレはおののいた。ロビー階から各部屋に行くのに2回エレベーターに乗り替える、しかもエレベーターでは上がったたり下がったり、「ああお手上げだ・・・」
- ◎「豪華な晚餐は 7時半から それまで プールに行こう」水着は午前中に近所へ買いに行った、「一番安い物でいいや」帽子込みで2000円也。76歳のオジンと、40歳代のわが娘二人と、中2の少年の4人がプールに入った。これでも、オレ、40歳代は4キロぐらい近所のプールで泳いでいた、泳ぎは上手くないがノンストップで泳いでいた。ゴーグルをつけスイーツと前に進むが、足首が攣る、こらああかん、まったく泳げない、なんとも格好の悪い話である。40歳代の娘二人は難なく泳いでいる。中2君はもっぱら潜り専門である。
- ◎「晚餐までの1時間 部屋で絵でも描こうか」水彩セットと画用紙は用意していた。「さあ 描いて かいて」3枚4枚と画用紙にえんぴつでなぐり描きを造り、「好きな色を入れて 何にも考えずに 色を入れていって」中2君固い筆遣いががぜん柔らかくなり、スーイスイ赤色が青色が画面を踊る。娘くんもケタイな猫の絵が踊っている。
- ◎豪華食事のメニューを持って帰ってきた。「シェフからの季節の一皿、インゲンマメとじゃがいものインサラータ(直訳:ロシアのサラダ)。じゃがいもの冷スープ、コンソメジュレを浮かべて。神戸ビーフの石焼ステーキ、旬の焼き野菜。デザートは、ピオーネとブランマンジュ ラムレーズンのジェラートとスパイス香るソース、ミルクティ。パンをたくさんいただいた、ワインは赤と白をいただいた、満腹まんぷく、美味しいのなんの、贅沢な最高の晚餐だった。翌朝も、豪華バイキングメニュー、炭酸煎餅を買って、11時チェックアウト、我々は茨木に帰った。東京組は、神戸にまわり、夜8時ころに帰り着いたそうだ。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎甲斐の国を出たヤマトタケルは、科野（信濃）の国を超えての、たちまち科野の坂の神を言向け終えて、そのまま尾張の国に帰り来て、先の契り通りに、ミヤズヒメのもとに入り坐したのじゃった。宴を催したが、ミヤズヒメが月の障りで、上衣の裾に障りの血がついておったのを見て、ヤマトタケルが歌う。次にヒメが歌う。

ひさかたの	あめのかぐやま	遠い彼方の	天の香具山
とかまに	さ渡るくび	その上を啼き声響かせ	飛び渡るクグヒ（オオハクチョウ）
ひはぼそ	たわやがひなを	その首のごと	か細く しなやかな腕を
まかむとは	あれはすれど	巻き寝ようと	われはすれども
さ寝むとは	あれはおもへど	共寝しようと	われはすれども
ながけせる	おすひのすそに	お前の着ている	上衣の裾に
つき立ちにけり		月のたってしまったことよ	

たかひかる	日のみ子	高くかがやく	日の御子様よ
やすみしし	わがおほきみ	八つの隅まで総べる	わが大君よ
あらたまの	としがきふれば	あらたな	年が来て過ぎゆけば
あらたまの	つきはきへゆく	あらたな	月が来てすぐゆく
うべなうべなうべな	君まちがたに	まことにまことに	あなた様を待ちかねて
わがけせる	おすひのすそに	わが着たる	上衣の裾に
つき立たなむよ		月立たなむよ	

◎それで、日を経て月が去るのを待って二人は結ばれ、まぐおうたのじゃった。

しばらくして、ヤマトタケルは草那芸の剣を置いて、伊服岐の山の神を平らげに行ってしまうたのじゃ。この山の神など、素手でたやすく倒せるものよ。白い猪に姿を変えているのは、この山の神の使いであろう。今殺さずとも、帰る時に殺せばよかろう。

山の神はにわかに荒れ狂うて、大粒の氷雨を礫のごとくに零（ふ）らせての、ヤマトタケルを打ち惑わしたのじゃ。ヤマトタケルは山の神を平らげることができずに山を下った。

ヤマトタケルはひどく疲れ果ててしもうて、杖を衝いてようやくのこと進むことができるほどじゃった。

そこからまた歩んで、海辺の尾津の前に出たの、ひとつも松の木の前元に到って腰を下ろすと置き忘れた太刀が、失せもせずに残されておった。

をはりに	ただにむかへる	尾張の方に	まっすぐ向き合う
をつのさきなる	ひとつまつ	尾張の埼なる	ひとつ松
あせを	ひとつまつ	ああなつかしき	ひとつ松
ひとにありせば		なんじが人であったなら	
たちはけましを		太刀を佩かせてみましようものを	
きぬ着せましを		衣を着せてみましようものを	
ひとつまつ	あせを	ひとつ松	ああなつかしき

◎そこを発って三重の村に到りついた。「私の足は三重の勾（まがり）のごとくで、ひどく疲れ果てたことよ」というた。勾：まがり：まがる：とらえる：勾配とか勾留：拘留

◎じめじめの雨が続いた日が終わって何日たったか、えらく暑い、極暑の日々だというのが、えらく暑い、字を替えて熱いにしようかな。ただ寒がりのオレは、さほどこの暑さ応えてはいない、なんとか元気に乗り切っている、クーラーもつけずのアトリエで。それより痒い、これは嫌だね、ダニかノミかなんだかわからないが20、30個所噛まれている。我が家には半野良猫がいる。半というのは、元々は野良猫に餌をやり、その子供たちが徐々に家の中に居つくようになった。多分こいつらがダニかノミかを運んできたのだろうと思う。かつて、ゴールデンレトリバーの小紅君が居た時は、「かゆいかゆい」と叫んだ時は、床の上を無数の物体が跳躍するのが見え、慌て、強烈虫よけ材を部屋に充満させ撃退した。ジジイになって目が見えない、何をどうしていいのやら、耐え忍んでいる。

◎今は夜、寝る前に一杯飲んでいる、いただいた上等の日本酒に氷を浮かべちびりやっている、これは美味いね。朝、「どうしよう これで終わろうか いやまだものたりない さわって失敗すれば元もこもない ええい・・・」と長らく思案したのち、青い色を入れ、「あああ あかん 今入れた色を洗い流そうか・・・」霧吹きを画面にかけじっと見つめていた。「ええい 白を もう一筆入れてみるか 豚毛の固い筆で・・・」これがよかった、「いった やった ほほほ・・・」下記写真の絵である。サイン “240723” と入れた。

◎昨日から今日の予定を立てていた。オレの日課は、午前中は絵を描く、それが終わって季節のいいころなら河原に行くのだが、この暑い季節は、河原へは4時間後に出かけるようにしている。先ほどの絵のサインが終わって、自転車、まずは11時頃、茨木ドライビングスクールに着いた。3年前の73歳の時もここに来たが、76歳の今、またまた後期高齢者運転免許更新の儀礼通過がある。カウンターに向かうと係りの女性がやって来て、来意を告げ書類を出した。「まだ乗られますか」「乗ります」という会話から、この質問はなんだったんだろうと思いながら、10月末の予約が完了した。当日、7500円の費用がかかるそうだ。前は実技運転で、「運転は完璧そうやったが一旦停止で滑らせたならアカン 一旦停止は停止線で 完全停止線ですよ」と言われた。それ以来、なるべく停止線でまずは完全停止を心掛けている。たしかに運転も下手になってきている、目が見えないのか、勘が鈍ってきたのか、人の多い市内ではゆっくり運転するようにしている。スマホを片手に持ってそのナビを確認しながら走る御仁がいるが、オレにはできない芸当であり、その車には乗せてもらいたくない気持ちであり、「いつか 事故 やるぜ」と心配している。知人に二人いる。

◎さあ次は市役所だ、マイナンバーだ。このマイナンバー、昨今ニュースであれこれ言われている。何がどうなってニュースになっているのか知らないが、何年も前の構想段階で、「個人情報洩れる」「国に管理される」なんて反対意見を叫ぶ人がいて、「絶対参加しないぞ」「あんなもので縛られてたまるか」とのたまう仲間がたくさんいた。今も、「入ってないよ」「関係してないよ」と豪語する仲間、「退会する 破棄する」という人もいるとニュースで聞く。

◎南館9階に上がるとおっさんがニコニコ迎えてくれた。

「マイナンバーはすでに持ってます マイナンバーと健康保険を連動させる ポイントの件 電子証明書」この三つのことができました。「最初の 4桁の数字 覚えてますか これが無いと前に進みません」「え もういらなと思って・・・ 記憶から破棄した・・・かな」「それがわからなかったら 役所の〇〇課でやり直しです 覚えてるか忘れたか 試してみますか・・・」

そんなことで、お姉さんの前に座らされた。この40歳代のお姉さん、オレのことを親しげに、「おとうさん よかったねえ・・・」と連発する。「数字を入れてみて・・・おとうさん」2.3度まちがった末に、多分これだという数字で機械が動き出した。「この数字を覚えておいてくださいよ おとうさん」「健康保険証としての利用申し込み これで7500ポイント」「公金受取口座登録完了で7500ポイント」「選択した決済サービス・チャージ金額に応じて5000ポイント」なんと、2万円分がもらえるとは、この仕組み、この制度、なんのことやらわからないが、国民全部に、マイナンバーカードに加入したら、2万円のお金を国が払う制度なのカネ。チャージに関しては、ペイペイに加入しかけていたので、役所から帰って処理をすると、お金が入ってきた・・・？

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎ヤマトタケルの晩年。よれよれになって倭を目指して帰っていく、息絶えてもまだその魂は白い鳥になり、伊勢の国から、倭を飛び越え、河内の志磯（しき）に留まった。

やまとは 国のまほろば	倭は 真秀なる国どころ（まほ：まほろば：素晴らしい地）
たたなづく あをかき	たたみ連なる 青々とした垣
山ごもれる やまとしうるはし	その山々に囲まれた 倭こそ美しい

いのち またけむひとは	命継ぎ 倭へ戻る人たちよ
たたみこも へぐりの山の	置の菰を重ねた 平群の山
くまかしが葉を うづにさせ	くまかしが葉を 髪飾りにせよ（立派な櫛の木）
その子	倭に向かう者たちよ

はしけやし わぎへのかたよ	なつかしき 我が家の方より
くもい立ちくも	雲がわきあがるよ

をとめの とこのべに	おとめの その床のそばに
わが置きし つるきのたち	わたしが置いた 剣の太刀よ
そのたちはや	その太刀を我に

◎ヤマトタケルが能煩野（のぼの）で息絶える。ここで妃や御子が現れ、声をあげ哭きつつ歌う。

なづきの田の いながらに	泥んこの田に残る 稲の茎に
いながらに はひもとほろふ	その稲の茎に 絡まり這いまわる
ところづら	山の芋のつるよ

◎ヤマトタケルの魂が、八尋藻の白い鳥となって天に翔り行くのを、妃や御子が追って歌う。

あさじのはら こしなづむ	丈低い篠原を歩いて 腰はよれよれ
そらゆかず 足よゆくな	空を飛べぬ人の身は もつれつつ足で行くよ

海ゆけば こしなづむ	海の中をゆくと 腰はよれよれ
おほかはらの ういぐさ	大きな河面の 浮き草のごと
海がはいさよふ	海の上を漂うて

浜つちとり 浜よゆかず	浜の千鳥は 浜辺をゆかず
いそづたふ	磯伝い

◎古事記では、ヤマトタケルの御子は六柱（むはしら）その中で、タラシナカツヒコがあとを継いで天の下を治めたもうた。

◎オホタラシヒコの大君の御年は百あまり三十あまり七歳（ももとせあまりみそとせあまりななとせ）、御陵は、山の辺の道のほとりにある。